

林文子先生を偲んで

## 林先生とコンピュータと財団

佐々木 教祐

林先生との出会いは、まだパソコンのなかったころ全国の医療短大に先だつてコンピュータの予算がついたので、どの会社のコンピュータを入れるか決める委員会であった。先生は核医学の画像を表示できる DEC という会社のコンピュータをおされ、私はより性能の高い他のコンピュータを推薦することになった。結局私の推薦するコンピュータが入ったのだが、これをきっかけにしてお付き合いが始まった。新しいコンピュータの導入が決定されると、先生はすぐに大阪まで行ってコンピュータの講習会に参加され積極的に利用しようとした。このような熱意につい動かされて、私は専門外である医学用の画像教育システムを作る研究に協力することになってしまった。林先生が短大におられた10年は、殆ど毎日と言っていいほど5時を過ぎると早めの夕食をして、三重大学からもらってきたアイソトープ画像の磁気テープの編集、名大病院および東市民病院から提供された CT 画像の編集、また MRI が開発されるとすぐに装置を見学に行き、画像データを提供してもらい編集して教材に加えていった。私は専門のコンピュータを担当し、林先生は専門の画像診断の知識を駆使され、林先生が退官される5年ほど前には、NIES(名古屋医用画像教育システム)と名づけたパソコンを使った教育システムが完成し、授業で使われ大いに学生に好評であった。

先生が退官される少し前に健康文化振興財団の設立が認められ、「健康文化」という雑誌の発行のお手伝いをするようになった。特にこの2年ほどは編集・校正に立ち会うことが多くなった。常々先生は「仕事をやり始めたら長続きさせる事が大切なよ」と言っておられた。この雑誌も5号からは年3回発行(1、5、9月)と決め、これを定着させるよう努力してこられた。今から思えば、林先生の長年の夢であった健康文化振興財団と雑誌「健康文化」を挫折させずに、発展させていくことを私に託すために、この13年のお付き合いは「林先生の意志を私に引き継がせるための教育期間だったのかなあ」と思うこともあります。林先生には人間としての生き方について多くのことを教えていただきました。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

(名古屋大学医療技術短期大学部教授)